

新人発掘の際の評価方法の妥当性の検討

吉岡伸彦、城田憲子、加藤 修、白井春人、川上琴美

日本スケート連盟フィギュア強化部

1. 目的

スケート連盟フィギュア強化部では、1992年から「全国有望新人発掘合宿」を実施し、かなりの成果を上げてきている。そこで、本研究では、さらに測定を進めると共に、過去のデータを再検討することにより、フィギュア・スケートのタレント発掘のための評価方法の妥当性を検討することを目的とした。

2. 方法

2003年度の全国有望新人発掘合宿のデータを過去のデータと比較する、強化合宿に参加したシニアおよびジュニアの選手を対象として同様の測定を実施し、日本の各年代のトップクラスのスケーターのデータを評価する、過去の参加者のその後の競技力を追跡調査する、の3点を実施し検討する。

3. 結果と考察

以下のようない点が明らかになった。

5分間走、垂直跳、反復横跳の3つの体力測定項目で、参加スケーター全体の評価の平均値が向上傾向にある。これは、インストラクター等が測定項目になっていることで、日常的なトレーニングに取り入れていることが原因と考えられた。その結果、5分間走と50m走の速度比から決定する体力タイプの判定の意味が失われている。

ジュニア、シニアの測定結果には、加齢に伴う向上以外にも、ノービスの結果との違いが認められず、有望新人発掘合宿に参加するレベルのスケーターは、すでにフィギュア・スケーターとしての体力的な特徴を有している。特に、握力が一般人に比しても、低値傾向であることには変化が

ない。

新人発掘の際の中位から下位のスケーターは、その後も、さほど成績が上がってこないのが、若年時の有望スケーターを絞り込む方法論としては間違っていない。しかし、より詳細に見ると、技術的あるいは心理的な理由で伸び悩む選手と、大成する選手の峻別は出来ていない。また、若年時に優秀な成績を残しているスケーターがノービスからジュニア、ジュニアからシニアに上がる段階で伸び悩むと、競技生活から退いてしまう場合も見られ、今後、何らかの対策が必要である。

4. 結論

ノービス世代からの長期的な強化は、対象選手を絞りきれないことや、強化対象だった選手がドロップ・アウトしてしまうこともあって、莫大な予算がかかるだけでなく、その効率も悪いのは明らかである。しかし、子供たちにとっては、一つ一つのイベントが、短期的な目標となって練習する動機付けになり、その継続が結果的に全体のレベル・アップにつながっていると考えられる。また、実際に合宿で行っている内容が、直接的・間接的なメッセージとなって、スケーター自身だけでなくインストラクターや父兄にも伝わっているようである。そのように考えると、「全国有望新人発掘合宿」で測定し評価しているという事実自体が重要なのであって、結果をどのように数値化しフィードバックするのことはさほど重要ではないのかもしれない。なお、今回の結果を踏まえて、握力の測定と、体力タイプの評価の2点については、取りやめることとした。